
対魔の猫～イレギュラー～

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対魔の猫（イレギュラー）

【Nコード】

N5323X

【作者名】

林檎

【あらすじ】

ここは現代、魔 と呼ばれる人に害を成す根源と、その根源を滅ぼすべく人によって作られた 対魔 という力の根源があった。双方はどちらにとっても煩わしい敵であり、滅ぼすべき相手だった。そして、その【対魔の力】を扱い、魔を滅すために生まれた存在を“魔を払う神の代行者”という意味でこう呼ばれている 【魔払いの使い】と。

とある一般私立高校に、一人の少女が入学した。

その黒く腰まで流れるような滑らかな髪に漆黒の瞳を持ち合わせ、端正な顔を緊張と期待に染め、真新しい白いワンピース型のセーラー服を着こなし一歩一歩その地を確認するように歩いていった。

「やっと…ここまで来たんだ」

少女の嬉しそうな、けれどどこか物足りなさそうな独り言は誰も聞くことなく皆彼女の横を通り次々に門の中に入っていく。今日は入学式とあって、生徒だけではなくその家族もいるようでたくさんの人が少女の横を通って行った。

少女も覚悟を決めたような面持ちで、ついにその門の中へと足を踏み入れた。

「これより、本年度の入学式を始めたいと思います。まずは本校の校長からのあいさつを」

少女を始め、たくさんの生徒が色々な面持ちで体育館の壇上を見つめ、新しい生活への期待感を、新しい環境への不安感を抱えていた。その中で少女は胸を高ぶらせながら校長の話聞き流し、これまでの苦渋を反芻していた。

（ここに入るまでどれだけ勉強したことか：同い年の幼馴染にも散々駄目出しされても、挫折そうになってやけ食いしても完全に諦めることなくやってきたのよ。必ずこの学校であの幼馴染が悔しがるくらいにまで青春を満喫して綺麗に卒業してやるんだから！）

少女の意気込み。

校長の演説。

体育館の熱気。

新年度に相応しい気持ちの浮つきと、長い校長の話と、たくさんの人達の熱気と。

それらが交じり合い交錯していく中で、ゆっくりと 時 の中で物語が動き出す。

少女の日常は、彼女の感じていた平和は、非日常へと変貌しようとしていた。

体育館での入学式も無事滞りなく終わり、少女は学校の校門前の壁に寄りかかっていた。

「はあ…入学式だけだったけど案外疲れた」

初めは生き生きとさせていた顔も、今は多少の疲労感を見せていた。そんな時に少女にかかる声があった。

「ねーお嬢さん、暇なら俺と遊ぼうよ」

明らかに少女とは面識のなさそうな掛け声を、軽薄そうに制服を着崩した男子生徒が声をかけてきた。少女はそれを横目で見やると、また前を向いて男子生徒と取り合おうとはしなかった。それにムカついた男子生徒は乱暴に少女の手を掴んだ。

「聞いてんのかよ」

「ちよっ離して下さい！人を待つてるんです！」

いくら振り払おうが、いくら力を込めようが女の力が男の力に敵うはずもなく腕を掴まれたままお互いの息がかかるくらいにまで近づいてきた。

「離してっ」

それでももみがく少女に、男子生徒はもう片方の腕も掴んで少女の体を壁に追いやり、見動きができないように封じてしまった。その時、

掴まれた腕にはめている金色の腕輪が小さく、金属音を奏でた。

「可愛い顔して結構なお転婆じゃんか」

男子生徒が悪者顔でニヤリと笑い、さらに少女に近づこうとした瞬間

「おい」

後ろから男の声がした。男子生徒は舌打ちしながら後ろを振り向いたがバキツと音がして倒れこんだ。

そこにはいつの間にか、男性生徒と同じ服装で茶色い髪を短髪で揃え、髪と同じ色の釣りあがり気味の鋭い瞳が男子生徒を見下ろしていた。

「汚い手でこいつに触ってんなよ」

男は固く握り締めた拳をまた振り上げようと構え、それを見た男子生徒は殴られた頬を押さえて慌てて逃げていった。

「まったく…大丈夫だったか？」

フンと鼻を鳴らして相手が逃げた方を見やったのも一瞬、すぐに少しづつきらぼくに少女に安否を確かめた。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「別に。帰るぞ」

男はそれだけ言って少女の前を歩き出した。少女はそれを小走りに追いかけて、隣に並んで一緒に歩く。その姿はさながら、恋人みたい

に見えなくもなかった。

少女の名前は時宮優香。トキミヤユカ

今年から一般私立高校に通う高校一年生だ。

「それにしても、殴ることはなかったんじゃない？」

男の名前は犬塚漣。イヌヅカレン

優香と同様に今年から一般私立高校に通う高校一年生。

「面倒だ」

二人は家同士が近く、小さいころから幼馴染としてよく一緒に行動していた。今日も、優香は漣と帰るために校門前で待っていたのだ。

「面倒って…手は痛くない？」

「あんな奴殴ったところで痛むことはない」

心配そうに自分を守る為に使われた漣の手を心配そうに見つめて聞
くが、漣は優香の方を見ることなく簡潔に答えた。

「なら良かった。今日は家寄ってくの？」

優香は漣が心配ないと言った言葉を信じ、話題を変えた。

「寄っていかなかった時があったかよ」

「ううん、ない」

ため息混じりに、本当に面倒そうに呟く漣に、優香は笑顔で答えた。二人が着いた先は一つの神社。その赤い鳥居をくぐり神殿前で二人は一礼をしてまた鳥居をくぐり神社を後にした。そして向かった先は神社の隣にある大きい屋敷。

「ちょっと待ってね」

優香そう言うと大きい屋敷に相応しい威厳ある門の前で淡いピンクで黒い猫のストラップが付いている携帯を取り出し、僅かな操作をしてその携帯を耳にあてた。

3秒ほどコール音がしたあと、どこかおっとりとした大人の女性の声が優香の携帯から聞こえてきた。

「あ、お母さん。うん、今家の前…もちろんいるよ」

そこで一度、優香は連を見て笑いかけた。連はどう反応していいのかわからず、仏頂面ではあったが、その場から立ち去ろうとはしない。

「うん、分かってる。ちゃんと腕につけてるよ」

そう言っつて、今度は携帯を持っていない方の自分の腕を少しだけ上げ、腕に嵌めている金色の腕輪を見つめる。連もそれを横目で見るが、眉をしかめてすぐにそっぽ向いた。

「分かった。うん、また後でね」

話も終わり、携帯を閉じて自分の家の門を軽く叩く優香。すると門が内開きに開き、中から巫女装束姿を着た世話人の女の二人、優香と連を出迎えるために並んで立っていた。

「「お帰りなさいませ御子様」」

「うん、ただいま」

「「いらっしやいませ 犬塚様」」

「邪魔する」

まだ高校生の女の子が「御子様」なんて仰々しく出迎えられているのが分かる通り、優香はこの町の一番大きな神社の一人娘だった。小さいころから神社の隣に大きな屋敷が構えられている家で神主の娘として最低限の教育を受け、今では町や一都市の自治会長などと一緒に対談出来るほどの力と顔を作り上げることが出来た。

連はその時宮家と比べると少し劣るかもしれないが、それでも肩を並べても支障がないといつていいほどの社家の息子だった。犬塚家もまた神を奉り、その土地に屋敷を構え時宮と家族ぐるみで良好な関係を築いていた。

世話人に出迎えられることなど慣れっこの二人はそのまま優香の私室へと向かった。

時宮家の屋敷はとても広く、長く日本古来の赤い手すりの廊下を何本も渡つてようやく奥にある優香の部屋へと着いた。

「相変わらずここは遠いな」

漣は32畳もある広い一人部屋で溜息をついた。

「これでも狭いほうだよ。それに漣の部屋だって同じくらいじゃない？」

「いや、お前のほうが広い」

優香が鞆をベットのそばに鞆を放り投げ、制服のままベットにダイブした傍ら。漣はそばにある座布団に腰をかけ鞆をそばに置き、目の前にある丸い大理石のテーブルに片肘をついてだらしない優香を

見やった。大きな古い社家の屋敷といえど、私室はある程度個人の趣味…もとい、年頃の女の子が愛用する現代っ子のものがちらほらうかがえる。

「おい、制服が皺しわだらけになるぞ」

「どうせもつすぐ来るよ」

誰が何が、とは言わない。これは毎回漣に注意されていることであると同時に優香がこの屋敷の中でも位が高いということを嫌でも再認識させられることだからだった。

優香が言い終わると同時に、優香の私室をノックする音が聞こえた。

「御子様。お迎えに上がりました」

「入っていいよ」

「失礼致します」

ドアを見向きもしない優香の前に、先程とは違う巫女装束の世話人が姿を現した。世話人は漣の前で一礼をすると、既にベットから起き上がって座っていた優香の目の前に正座をし、深く礼をして口を開いた。

「お帰りなさいませ、御子様。大巫女様からの言伝ことづてを預かっております」

「お母さんから？」

「はい。衣装変えの後、その足で犬塚様と共に「紫陽花アジサイの間」にお

越しくださるようじとのこと」

衣装変えとは、ここでは正規の衣装　正装に着替えることを指す。世話人の言葉に、いち早く反応したのは漣だった。ついていた肘を離し、世話人を睨むような目付きで詰問する。

「どうして俺まで行かなきゃならない」

「漣、目付きが怖いよ」

「お前は少し黙ってる。俺らの家はお前らに指示権でも渡した覚えはないぞ」

そんな漣のきつい言葉にも、世話人は臆することなくたった一言で漣を黙らせた。

「犬塚家当主様のご意見です」

「…ちっ」

「ほら行くつよ」

忌々しそくに舌打ちした漣の腕を、優香は引っ張り上げて一緒に部屋を出た。

先頭に立った世話人の後ろを二人は仲睦まじく　実際は優香が嫌がる漣の腕を楽しそうに掴んでいるので語弊があるかもしれないが　腕を組んで歩く。

「御子様はこちらに。犬塚様はこちらです」

二人は世話人の言葉で別々に分かれ、隣同士の部屋に一人ずつ入っていく。5分ほどして先に出てきたのは白い上衣よりも存在感を醸し出す黒い袴を着こなし、袴同様の黒い烏帽子を被り、腰には不似合いな日本刀を携えた、稟というより清冷せいれいという言葉が似合う漣の狩衣姿だった。

「はー…親父達もグルかよ」

深く溜息をついて日本刀を鞘から抜き、刃毀れはじほのチェックをしていると隣の部屋から優香が姿を現した。

「…これから人斬りでもしにいくの？」

「勝手に俺を人殺しにするな」

そう言つて優香を振り返つた漣はその姿を見て軽く息を呑んだ。

深紅の袴は白い上衣に良く映え、その細い両肩から脇を通つて背中
で喋喋結びをされた細い綱の襷たすきの両端には小さな金色の鈴が小さく
その存在を知らせていた。白くすらりとした首には黒い首輪が巻か
れ、その首にも同じ鈴が動いたびにちりんと音を立てた。袖の下の
ほうには赤く線上に刺繍が入つていて深紅の袴とも相まっている。
そして腰まで流れるような艶やかな黒髪は一本の白い布によつて高
く一本に纏められていた。中にはトレーニングウェアを着ているの
か、時々上衣の袖口の中から黒く手首までぴつたりとした袖が見え
隠れしていた。
そんな普通、所謂一般の巫女装束とはかなり異なる巫女の正装で稟
と佇む優香がいた。

「…相変わらずその襷と首の鈴は煩わづいな」

「仕方ないでしょ、これが正装なんだから。漣だつて銃刀法違反で捕まるよ」

「俺だつてこれも含めて正装だ」

全く刃毀れのない日本刀を鞘に戻しながらそんな軽口を叩き合う二人の前で先程優香達を案内した世話人が話しかけた。

「大巫女様がお待ちです」

そう言いながら二人に背を向けて歩く世話人の後を、漣は目付きの悪い目をさらに尖らせながら、優香はそんな漣を見て苦笑いしながら付いていく。

1 - 2 (後書き)

神社の知識がないのは大目に見てください…。

でも巫女服や神主服っていいですよ。…ごめんなさい、趣味です、はい。

まだまだ出したいものがたくさんで追いついていかない…でも、趣味のために頑張ります！

襖の上の壁に大きく「紫陽花」の間と書かれた板が立てかけられた部屋の前で世話人は静かに正座をし、少しだけ襖を開けて小さく奥にいる人物へと話しかけた。

「大巫女様。御子様をお連れ致しました」

「ありがとうございます。もう下がっていいですよ」

中から聞こえてきたのは優香の電話から微かに聞こえた、あのおつとりした口調の女の人の声だった。優香と漣をここまで連れてきた世話役はきつちりとした動作で二人に一礼し、その場から退いた。

「お母さん」

世話役がいなくなったのを確認した優香は廊下から母親に声をかける。最低限の礼儀として、今入っていいのかということ問うためだ。

「二人とも、お入りなさい」

どこか緊張感に欠ける口調を聞きながら先に優香が入り、その後には漣が続き襖を閉めた。

広々としたフローリングの床、正面には神を祭る小さな祭壇が、その下には何本も飾られた日本刀や傍に備えられている槍などどこか殺伐とした雰囲気醸しながらも気が締まるような部屋に一人の女が正座をして二人を笑顔で迎えていた。

「さあ、お座りになって」

女の名前は時宮香理。トキミヤカオリ

優香の母親にして、時宮神社の大巫女を務めるこの神社の中でも地位の高い女性。

「…お母さん」

そんな母親を見て、優香は対峙するように座りながらもふて腐れたような声を出した。

「なあに？」

「どうして私たちは正装なのにお母さんだけ違うの？」

優香の言うとおり二人の正装とは違い、香理は艶やかな薄紫の着物を身にまとっていた。そんな娘の文句にも怒りはせず困ったように片手を頬に当てて、ため息をついた。

「いくらお母さんの見目が若いとは言っても、もうあなたたちと同じようなものを堂々と着れるほど中身は若くないのよ」

そんな香理のため息に、優香の隣に座っていた漣がしれっと言葉を發した。

「大巫女様なら、優香よりもとても綺麗に映えるほど着こなしが良いと思いますか」

「あらあら。漣君はお世辞が上手ね」

「漣！どういう意味かな！」

「そのままの意味だ。俺の言葉の意味が分かるほどまでにはお前も成長したか」

「そりゃあ漣のスパルタで……って話が違う！」

「それより大巫女様の話を聞くぞ」

「もう！後で覚えてなさいよ」

コントのような二人のいつもどおりのやり取りを、香理は嬉しそうに見つめていた。そして二人が自分の方に意識を集中させたのを確認してから今日呼び出した用件を話し始める。

「今日二人に来てもらったのは、二人の正装の件です」

「正装？」

「それならば、大巫女様も何度がお目を通していらっしやるはずですが」

二人の疑問に、香理は軽く頷いた。

「ええ、そうね。私が言いたいのはそれぞれが所持する 神具しんぐのことですよ」

香理は二人の傍らに置かれた、一般人にも普通の神社にも必要とす

ることのなく道具を見た。漣も香理と同じものを横目で見やり、先を促すようにまた香理を見る。

「そろそろ、屋敷外での所持を許可してもよい心構えになってきたように感じました」

すっと目を細め、口に軽い笑みを浮かべた香理に、漣は軽く瞳を揺らした。それを確認した香理は何も気づいていない優香を見て問いかける。

「優香、どう思う?」

「えっと、どうって…お母さんがそう認めてくれたんなら、巫女としても娘としてもすごく嬉しいとは思うよ。ただ…」

「ただ?」

「こんなの使う機会なんて、無いと思うけど」

先を促し言わせた優香の台詞に、香理は自分の娘を強く抱きしめた衝動に駆られた。使う機会なんて無い…本当に、そうであればいいのに、と優香の言葉が母として香理の頭の中を反芻し大巫女としてその考えを振り払った。

優香の言葉に何も答えず、ただ静かに微笑む香理を見て漣は横目で二人に気づかれないように優香を見た。何も知らずに、その手にある 神具^{しんぐ} を見つめるその姿。

「話はそれで終わりです。結論として、二人には 神具^{しんぐ} の屋敷外所持を認めます。なるべく持ち歩くように」

香理がそう締めくくると、優香はまた不満そうに口を尖らせていた。

「優香？」

「…話がこれだけなら、別に正装じゃなくても良かったんじゃないの？意外と時間かかるのに」

そんな優香の子供じみた、優香も分かっているだろう不満を漣は敢えて一刀両断する。

「馬鹿言つな、例え短時間だろうとこれは正式な言伝ことづてだ。大巫女さまが許可されたということはそれだけ大事になるんだ」

「あらあら、もしかして漣君も大げさだと思つてた？」

一刀両断するついでに見え隠れしていた漣の本心に、香理は思わず苦笑いした。そんな漣の言葉に、優香は頬を膨らせることはしたが、それ以上文句を言うことはなかった。

「もう戻っていいですよ」

二人の香理の言葉に、二人は同時に立ち上がり、漣は香理に一礼しですでに背を向けていた優香のあとに続こうとした。

1 - 3 (後書き)

漣と優香の正装疲れた…。とりあえず、次は優香抜きで話が進みます。

さてさて、予定通りに進めばいいが…。

「あ、漣君は少し残ってね。優香はちゃんと宿題やっておきなさい」

「え……漣に教えてもらおうと思ってたのに」

「後で教えてやるから、少しは自分で進めてろ」

「絶対だよ？部屋で待ってるね！」

漣の提案に満面の笑顔で手を振りながら部屋をあとにする優香を、漣は一瞬だけ、本当に一瞬だけ包み込むような優しい微笑みを見せた。

それを香理は、見て見ぬ振りをする為に顔を伏せ、片手をそっと自分の目の前の床についた。

「……失礼致します」

この合図は、内密にしたい話をするときの合図であり、近しい間柄のみに使われる合図でもある。

その合図を受け、漣は香理の前に座り姿勢を正した。

「……私達は、やはりあの子に甘いものね」

少し間を空けて、その沈黙を噛み締めるように香理はしんみりと苦笑いしながら言葉を発した。その言葉を、漣は聞いててなお、それには何も言わず軽く下を向き、俯く動作で返事をした。
そんな漣を、香理は困ったように笑った。

「しかたがないわよね…これが私達の宿命さだめなんだもの」

「…そうですね。もう、そんな時期だということは覚悟していました。優香のことも、あいつの婚約者としてこの先も守り抜く所存であります」

「とても心強い言葉ですが…いくら犬塚との口約束とは言え、重荷を押し付けてしまっているわね」

「とんでもございません。どの道あいつも俺と同じ道を歩む者、時がくればそれなりの覚悟を持てる人間であるということをお大巫女様もご存知のはず」

「それでもやはり、わが子は可愛いものです。犬塚の時だって、どれだけ渋り我が家に入り浸っていたものか…」

「…そのようはお話は初耳でございますが、身内の者がご迷惑をかけ申し訳ありません」

「いえ、漣君が知るべき話でも謝る話でもありません。むしろ、漣君にはあの子のことを任せてしまっているのを心苦しいくらいですから」

香理は一旦言葉をそこで切り、深く溜息をついて軽く頭を左右に振った。

「…心中お察しします。近々、あいつに話さなければならなくなる時がくるとは…」

漣も困ったように眉を曲げて香理を労わるようにその言葉を継いだ。漣の言葉に、香理は目の前の出来た少年に優しい笑みを浮かべて大人としての余裕なのか、気遣う言葉をかける。

「本当に、しかたがないことですね。そして、これが今回の本題でもあります」

「なんででしょうか」

「…本当に近々なのです。漣君も、あなたのお父君から話は聞いていると思うので手短に言います。あの子の、護衛を…いえ、あの子を守ってあげてください。あの子はまだ何も知らない。もちろん漣君はそれを知っているはずだし、だからというわけではありませんが、やはりあの子を任せられるのはあなたしかいないという結論に、我が時宮家宮司との話しに至りました」

「もったいなきお言葉です。優香のことは、この命に代えても守り通すと誓いましょう」

「…命を賭けてはなりませんよ。あなたも、犬塚家の跡取りであり【八柱】^{やほしちゆう}の一人でもあるのですから。それに…」

「それに？」

そこまで言って言葉を切った香理に、漣はその先を促した。

「あなたは優香の婚約者です。私達も孫の顔を見たいのですよ」

促された香理はこの上なく嬉しそうな笑顔で言い切り、聞いた漣は

思わず一瞬居心地悪そうに身じろぎしたが苦笑いして香理に返事をした。

「…そちらについても、善処致しましょう」

香理の偽らざる大巫女としてと母としての二つの本心に、漣は苦笑いする他なかった。

香理との話が一通り終わり、一礼して「紫陽花の間」を後にした漣は優香の部屋までに、少し長めの廊下を歩きながら考えに耽っていた。

「【八柱】、か…そんなものに興味がないというのに」

苦々しげにそう呟いた言葉は、誰にも聞こえることなくこの広い屋敷の中に消えていった。

由緒ある社家には色々を背負うものもあれば、定められた道というものもある。優香と漣はそれぞれの家の本家の跡取りであるが為に逃れられない宿命がある。神具を使う【八柱】…それがどれほどの意味を持つのか、何も知らない優香も漣もまだ真に分かっていなかった。

1 - 4 (後書き)

今回は話の都合上少し短めに切りました。

しかし、伏線というのは張るのが難しいですね…。

なんだか作者にとってもきな臭くなりそうです。

「優香、入るぞ」

ノックもせずに優香の部屋に入る漣。

「あ、漣。ここ教えて」

部屋に入ると漣の言うとおりに、机の上に教科書やらプリントやらノートを目一杯に広げ眉を八の字に曲げて涙目になっている優香がいた。

そんな優香を見て、漣は先程香理と話したことを思い出したがなんだかそれらを考えるのが馬鹿らしくなり、思わず小さく笑ってしまった。

「何で笑うの…本当に難しいんだよ!」

漣の笑みを勘違いした優香が膨れっ面で文句を言うが、漣はそれを訂正せずに優香の隣に座ってその勉強の進み具合を吟味した。ノートには今回の宿題が半分くらいしか進められておらず、漣と香理が話している時間を考えればもう少し進んでも良さそうな量ではあったが、漣はそれを指摘はせずいきなり優香が進めていた問題の間違いいから指摘していく。

「違う。ここはこう…何回教えたと思ってるんだ」

「まだ二回しか教えてもらってないもん」

「自慢げに言うな。一回で覚えろ」

「無理だよ。あの学校に入るのだからってすっごく苦労したんだから！」

「一番苦労したのは俺だ。何回も何回も同じことを教えている身にもなれ」

「聞・こーえーなーいー」

「…ったく、とりあえずここまで頑張れ。あとは明日教えてやる」

「え？いいの？」

「確かこの宿題は明後日までのだろ。なら明日で終わらせるぞ」

「ありがとう、漣」

話も宿題も一段落したところで、優香はベットに寝転がり台所から持ってきていたお菓子をつまみながら漣を談笑していた。

「そついえば、お母さんと何の話をしてたの？」

その言葉に、同じように床に座ってお菓子をつまんでいた漣の眉が微かに跳ね上がったが香理との話をそこでは言わず、逆に優香に話しかけた。

「大した話じゃない。それより、しんぐ神具 は持ってるか？」

「あるよ。こじこじ」

そう言っつて枕の下から しんぐ神具 …二丁の拳銃を取り出した。銀一色

に鈍く光りながらもそれは人を傷つけることが出来ると思い知らさせる威圧感プレッシャーを放っていた。ベットから起き上がった優香は二つの拳銃を両手で漣に向かって構え、話しかける。

「ねえ、漣」

「なんだ」

「私漣に向けてるんだよ？」

「それがどうした」

しかし優香の言動にも動じず、漣は目の前のお菓子から顔を上げずに食べる手を止めない。

その姿を見て、優香は溜息をついて二つの拳銃を下ろした。そして漣の隣に座り、同じようにお菓子に手を伸ばす。

「もう…私が撃つちゃうかもとか思わないの？しかも人が朝早くに作ったクッキーばかり食べるくせに作った本人には見向きもしないなんて、失礼しちゃう」

「はいはい、悪かった悪かった」

言葉通り悪びれもなく謝る漣に、ムツとした優香はお皿ごと漣から遠ざけ、所謂いわゆるお預け状態をつくった。

「あ、お前！俺の楽しみを奪うな！」

「私が作ったんだから食べる権利があるかどうかは私が決めます」

「なに敬語使つてすましてんだ。いいからそれ寄こせ」

優香からお菓子を奪おうと、体を傾けて手を伸ばすと優香はその手から逃げ立ち上がってベットに座り一人で食べ始めた。

「そんなにクッキーが食べたいなら買つてくればいいじゃない」

「馬鹿言つな。俺はお前の作ったものだから食いたいんだ」

「え？じゃあもしこのクッキーが買ったものだったら？」

「別にそこまで食いたいとは思わない。あ、明日はスイートポテトが食いたい」

「あんたね…今さりげなくおねだりしたでしょ」

中々聞けない漣の言葉に、一瞬心臓が跳ねたかと思うと次の催促の言葉に呆れたように肩を落としてクッキーを机の上に戻した。その途端に漣はまた手を伸ばしてクッキーを口に運ぶ。そんな漣を見て、優香は嬉しそうに微笑み、ベットから離れ胡坐あぐらをかいている漣の足の間で腰を下ろした。

1 - 5 (後書き)

また話の都合上短くなってしまった…作者はどうも歪んだ恋愛が好きだと実感しました。

それにしてもユカがお菓子作りなんて…作者にも分けて欲しい…。

「…どうした」

いきなり自分と机の間に割り込み自分に背を向け体を預ける優香を後ろから軽く抱きしめ、耳元で囁いた。

「ねえ、漣」

優香も自分の腰に手を回してきた漣の腕に手を添え、話を続ける。

「なんだ」

「私達、婚約者フィアンセなんだよね？」

「そうだな。ただ俺はその言い方は好きじゃない」

「じゃあ婚約者ごんやくしゃ？」

「ああ。そっちの方がいい」

「そっか。あのさ、すごく言いつづらんだけど」

「あ？」

「その…仲間外れは、ちょっと寂しいかも」

「……………」

漣はその言葉で優香が何を聞きたいのか瞬時に理解した。

先ほど香理と二人きりで話した内容と、漣がいつもと違う態度を理由という鎖で直結させ、それが自分にも関わっているのにも関わらずそれを教えてくれないことに多少の不安と不満が混じっているとしかし、それでも漣は、優香の言葉にしばらくの沈黙を返した。

言いたいと言いたくない。本当の話をすれば少しでも優香に対する危険を減らすことが出来るかもしれない…だが、それは優香を自分の知る危険に巻き込んでしまうということでもあり、婚約者としてそんなことはとても賛同出来ることではない。漣はそんな矛盾を心の内に抱えながら何とか言葉を紡いだ。

「…少しの間だけだ」

「今、教えてはくれないの？」

分かってはいた。こんな言葉で優香は納得させることは出来ない。だが、今ここで抱きしめている細く自分より小さな体に触れているだけで真実を言うのを躊躇ってしまう。

「…無茶言つな。お前は明日の宿題でも手一杯だろ」

「もう。教えてくれないならそう言うてくれればいいのに」

「教えないとは言っていない。ただ、今は時期じゃないだけだ」

「…それを教えないって言うんじゃないの？」

「違う。もうお前黙ってる」

「なっその扱いはひど」

「

漣の言葉に不満だと文句を言おうと振り向いた瞬間、漣に顎を掴まれ拒絶する間もなくその唇を漣と同じもので塞がれ、優香は目を見開いた。

「これで勘弁しろ」

「……」

「優香？」

いきなり漣に背を向け膝を抱えて俯いてしまった優香に漣は話しかけるが、優香は顔を上げずにぼそっと呟いた。

「……フィアンセ婚約者だからってやり過ぎだよ」

「だから、俺はその言い方は好きじゃない」

「わざとに決まってるでしょ」

「なに拗ねてんだ。初めてでもないくせに」

「確かに、どっかの誰かさんがムードもなくしてくれましたからね」

「…まだ根に持ってんのかよ。悪かったって謝っただろ」

「謝ったくせにまたするわけ？反省してる？」

「してる」

「…本音は？」

漣の即答に胡散臭そうに優香は疑わしい口調で確かめる。

「…正直、役得だと思ってる」

「やっぱり反省してないじゃない！」

ぱつと振り向いて俯きながら漣の鎖骨辺りをポカポカと殴り始めた優香を漣はなんでもなさそうに受け流しながらさらっと言葉を発した。

「婚約者なんだから、別にこれくらいいいだろ」

なんでもないような言葉に、優香は殴る回数を更に増やしながら反論する。

「婚約者って言ったって、私の親と漣の親が昔に口約束しただけで実質無効でしょ！」

「まあ、そうなるな」

「もう！付き合ってるわけでもないのにどうして婚約者なんて！」

「別にいいだろ」

「よくない！女心を分かれこの馬鹿！」

「はいはい」

「本当に…付き合ってるわけでもないのによく出来るね」

まだ殴り続ける優香の両手を掴み、漣は優香の顔を覗き込んだ。そこには顔を真っ赤にしながら怒った顔をした優香が漣を睨み付けていた。

「…そう怒るなよ」

「怒ってない。漣の神経を疑っただけ」

「それを怒ってるって言うんだ」

「違うもん。彼女でもない私にキスできる漣がおかしいって思っただけ」

「だから、婚約者だからだろ」

「そうじゃないよ」

優香はふと真面目な顔をして漣を見上げた。その漆黒の瞳に、漣は一瞬吸い込まれるような錯覚を覚えた。

「キスは普通、好きな人にするものなのに漣は婚約者という肩書きだけで、好きでもない私にキスできることが信じられないの」

「…駄目なのか？」

「駄目とかじゃなくて、普通じゃないの」

「普通か…」

優香の言葉の普通という意味。優香の言っていることは意味も分かるし納得も出来る。だけど、漣はそれよりも普通という言葉に引っかけた。優香の口ぶりには普通とは優香の基準になっていて、それから外れるとそれらは全て普通ではなくなり、大半の人がそれを理屈ではなく本能で納得しているというニュアンスが含まれていた。それを踏まえても、漣と香理のやりとりも出来事も普通でないし、これから優香を巻き込むであろうと分かっている出来事も普通ではない。そんな時、優香はやありそれを普通ではないと認識しそれを普通と認識し続けてそれが全てだと思いついていた自分を、優香は否定するのだろうか。漣にとって、優香が巻き込まれるか否かよりもそっちの方がより心が痛むことであった。

1 - 6 (後書き)

…少し謎かけがすぎたように感じました。

さて、少し歪んだユカとレンの関係。婚約者であり幼馴染という立場だけの関係の中一体どう発展していくのか…それは作者にもわかりません。

まあそれはレンの動きっぷり次第だよな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5323x/>

対魔の猫～イレギュラー～

2011年12月11日03時00分発行